

生き物技術としての造園(2)

誌名	造園雑誌
ISSN	03877248
著者名	亀山,章 養父,志乃夫 倉本,宣
発行元	日本造園学会
巻/号	53巻2号
掲載ページ	p. 101-104
発行年月	1989年11月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



■平成元年度全国大会分科会報告■

生き物技術としての造園

— その2. 造園植物呼称の統一を考える —

企画責任者 亀山章*
養父志乃夫**
倉本宣***

はじめに

造園技術は生き物を扱う技術であり、この分科会は生き物を扱う技術のあり方を検討する目的で企画したものである。昨年の分科会では、生物の基本的な単位である「種」について多様な討論がなされた。2年目にあたる今回は、昨年、多くの意見が出され、また、急を要するテーマであると考えられる造園植物の呼称の問題をとりあげることとした。

1. 話題提供の内容

1) 造園植物の呼称の問題

亀山 章(信州大学)

造園植物の呼称は地方によって異なり、時代とともに推移している。植物の呼称が変わる原因には、①新しい種の出現、②植物分類学の進歩に伴う学名の統合や細分化、③人間生活と植物との関係の変化、すなわち歴史と文化の発展、の3つが考えられる。

明治時代以降、植物分類学の導入にともなって、新しい和名の呼称がつけられた植物があり、従来の地方名や俗名と併用されている場合には混乱を招いていることがある。また、外国から植物を導入する際に、適切な和名を付けないまま属名や学名そのものをカタカナ表示で呼んでいることも多い。厳しい環境での植栽やアメニティの高い植栽、質の高い植栽のためには、植物の種の取り扱いをより厳密に行うことが求められるようになっており、植物の呼称の統一はその前提となるものである。

呼称の統一は、このように設計や施工の場で充分な対応が求められている。また、生産の場においても高品質、高企画化、および大量生産の技術を確立していく際に呼称の統一は必須の課題である。

2) 呼称の問題点と現状

山本紀久(憐愛植物設計事務所)

造園植物の呼称の問題点は、①膨大な数の植物が現存すること、②植物はさまざまな呼称を持っていること、の2点にまとめられる。ここでは、その現状を公共造園に用いられる植物を対象として具体的に取り上げる。なぜなら、公共造園の場合、設計・施工・生産が別々に行われるため、くいちがいが起きやすいからである。なお、検討に当たっては造園設計の場面で一般に用いられている「建設物価」に記載されている植物名を中心に、以下に問題点を挙げる。

①分類の段階の総称名(種レベルでない名称)が用いられている。

例:ツバキ類, サトザクラ, ヒラドツツジ, ポプラ, ハギ, ユーカリ類, コクマザサ

②和名がなじまれていない。

例:アケボノスギ(メタセコイア), ムラサキハシドイ(ライラック), スズカケノキ(プラタナス), アメリカヤマナラシ(ポプラ), ハナゾノツクバネウツギ(アベリア), トキワサンザシ(ピラカンサ), タチバナモドキ(ピラカンサ), アメリカヤマボウシ(ハナミズキ)

③生産者の間では、一つの名前で複数の種類が扱われることがある。

例:サザンカ, イヌシデ, シダレザクラ, エンジュ, クチナシ, イヌツゲ, アジサイ, ヤマブキ, レンギョウ, エニシダ, クマザサ, ムクゲ, ヤマザクラ

④園芸品種の多い植物が品種レベルまで区別して記載されていない。

例:ツバキ類, サザンカ, モミジ類, ウメ, サトザクラ, ハナミズキ, ヒラドツツジ, セイヨウアジサイ, キョウチクトウ, ハギ, ライラック, コトネアスター類, コニファー類

⑤分類学では同一種でありながら、造園では形態に区別が必要なもの(雌株の果実を観賞するものを含む)

*信州大学農学部

**東京農業大学短期大学

***東京都多摩環境保全事務所

例：クスノキ（新芽の色）、アセビ（新芽の色）、カナメモチ（新芽の色、ベニカナメとして区別）、ヤマザクラ（芽の色）、オオシマザクラ（花の色、芽の色）、マサキ（葉の大小）、ウメモドキ、クロガネモチ、アオキ、イイギリ（雌株の果実）

⑥名前と異なる種類が流通している。

例：タイサンボク（ホソバタイサンボクがほぼ全部）、モミ（ウラジロモミがほぼ全部）

⑦通称名に問題があるもの

例：ドラセナ（属名はコルディリネ）

ここに示したのは問題点のごく一部であり、対象を広げると限りなくある。現時点で、呼称を整理しなければ、混乱がますます大きくなるのは目にみえている。

近年、地域特有の自然とそれを構成する植物個体を大切に守る考え方が定着してきているし、自然界に生息する生物との関連で植物をとらえる生態学的な視点を持った環境づくりも求められてきている。そうなれば、同一種であっても地域による個体差などが重要になり、それぞれをどのように表現しておくのかなど、植物の名前をめぐる問題は大きく、その解決の意味も大きい。

3) 諸外国における呼称使用の現状

勝野武彦（日本大学）

ここでは、ドイツにおける事例を中心に各分野ごとに呼称使用の現状について述べる。

①州政府の造園の実施設計（高速道路緑化）の事例

造園の実施設計では、学名とドイツ名を併記している。短縮形として表記する場合には、学名の属名（1文字）と種小名（2文字）を用いてPsyのような形式で、学名の短縮形を用いている。

②西ドイツ造園協会（BGL）資料にみる事例

「子供の遊び場での危ない植物」のなかで、不適当と思われる種を選び出し、学名とドイツ名とで表記している。域内統合が進むヨーロッパでは、国際化の中で、共通の用語として学名を用いる必要性が増している。

③緑化等材料生産側でのカタログにみる事例

観賞用イネ科の植物カタログでは、学名、ドイツ名、適地、草高を記載している。また、水生植物カタログでは、ドイツ名、学名、花色が記載されている。いずれも、学名とドイツ名の併記である。

④その他の一般情報メディアにみる事例

園芸用月刊雑誌および新聞記事（家庭・園芸欄）では、ドイツ名での記述の後に学名で補足されている。

一方、自然保護の機関誌では、一般の人は動植物を学名よりもドイツ名で記憶しているので、種の保存等、自然保護のためには、学名だけではなく、すべての動植物にそれぞれふさわしいドイツ名を付けることが必要だと主張されている。

西ドイツでは、外来種の導入ルートや関係者などの記

録が「種の来歴書」として完備されており、種を大切に扱う姿勢がうかがわれる。

我が国でも、国際化の中で西ドイツと同様に学名を使用する必要性は着実に高まっていくと考えられる。

4) 造園植物の呼称整理の進め方

佐藤岳三（榊西武造園）

緑の量的拡大は、昭和40年代に特に顕著であり、その後も量的拡大は続けられてきた。しかし、近年になって、世相を反映して緑の量だけでは満足できない細やかな植物との接し方が求められるようになってきている。

造園植物の呼称の不確実さによる混乱について、事例に基いてその整理の必要性が報告されてきたのを受けて、呼称整理作業の進め方について具体的に提案したい。

整理の対象とする造園植物は、当面、公共用緑化樹木とする。実際に公共用緑化樹木として使用されている植物は400種程度になるものと推定される。この植物の選定に当たっては、「建設物価」、「積算資料」、「建設省公共用緑化樹木一覧」、野生植物、園芸植物、外来植物および林業用樹種の図鑑など広い範囲から抽出することにする。

呼称の整理に当たっては、造園植物呼称整理委員会を学会内に発足させて、生産者、設計者、発注者、施工者各々が、造園家としての基本的な認識にたつて協力して作業を進めなければならない。

5) 造園植物呼称の認知組織と普及方法

倉本 宣（東京都）

造園植物の呼称を整理したものを認知する機関は、公正な立場にある学会の中に置く。佐藤氏の提案の呼称整理委員会がこれに当たる。

呼称の整理が進んだ段階で、「造園植物名称一覧」を作成する。このとき、山本氏の指摘された分類学的には意味がなくとも造園的に重要な形質については併せて表記する。ひとたび、整理作業が完結しても、新品種や外国からの新たな導入種が存在するので、定期的に追加改定作業を行い、「名称一覧」をアップトゥデートなものにしていく。さらに、こうして整理された呼称の使用を他の機関や団体に呼びかける。

造園植物にとって重要な形質には、花や葉の色など、さく葉標本では保存できないものも多いので、生体展示の場が不可欠であるから、造園植物園を設置することを提案する。

また、造園植物をはじめとする植物の同定が確実にできる人材を育成することも急務である。資格制度を設けて、学会などの公けの組織によって認定することも必要であろう。

2. コメンテータの発言

吉田博宣（京都大学）

京都の庭園に外国人を案内する機会が多いが、植物名は必ず学名でしかも属名だけではなく、種小名まできちり質問される。一方、造園で扱う対象にはいろいろなレベルがあり、デザイン的なレベルでは「さらっとした木」、「重い木」などといった大雑把な形態で議論していれば間に合う。レベルに対応した呼称が必要だと考えられる。

市民レベルでは方言名で植物が売買されている実態も考えて、方言名を併記したほうがよい。したがって、呼称は統一するよりも整理することの方が望ましい。

近藤三雄（東京農業大学）

造園植物の呼称の問題は、かつて自分たちの同好会でも議論したことのある重要な課題であるが、同好会レベルでは扱いきれない問題であるので、いずれ学会で取り上げたいと考えていた。今回の企画は誠に結構なことだと思う。

学会論文の植物名の記載およびその校閲も基準がなくまちまちであるが、まずこれから改めるべきである。

呼称の統一にはデメリットもある。小学校の生活科の中に「公園に行ってみよう」という単元があるので、全国の小学生が公園を訪れている。小学生にとっては、ソメイヨシノよりもサクラであり、樹名板の表記については十分な考慮が必要である。

整理に当たっては、理学部の植物学とは違って、人との関わりの深い造園学の植物名を付けるという方針の下に、早急に進めていくべきである。呼称の統一には問題があるので、呼称の整理を進めていくのがよい。関連領域である建築や土木の分野と付き合ううえでは、サクラと総称するようなレベルの粗い呼び方も必要なので、名称としているいろいろなレベルのくくりを作っておく必要がある。

岡本認明（大阪府立大学）

名称の統一は望ましいことではあるものの、太平洋文化圏の名称を用いる結果となるであろうから、地方の文化が消えていくことに寂しさを感じる。

会社の名前ですら、アルファベットで書く時代なので、学名を表記する必要もある。学名の表記に当たっては、命名者名を省略し、属名と種小名だけを記して、種小名が人名由来であっても小文字で始めるという簡略な形式を用いればよい。他方、造園材料を誰が作り、使うのかを考えると、地元の人がかかる名前であることも必要である。両者の要求を満たすような方法をとってもらいたい。

3. 討 論

濱野周秦（東京農業大学） 呼称の統一には問題があるので、呼称の整理を進めるという方がよい。具体的には、「造園ハンドブック」に700種あまりの造園植物が記

載されており、倉本氏の資料でもこれには問題が少ないので、「造園ハンドブック」を基礎にして作業を進めることが望ましい。

外来樹種に和名を付ける作業を自分も行っているが、難しい作業である。品種名については、括弧をつけそのまま用いている。

どんなにきれいに整理ができたとしても、呼称と現物が一致しなければ、混乱が増すばかりであるから、造園植物園はぜひとも必要である。

この分科会の企画をぜひ現実化して欲しい。

北村文雄（大阪芸術大学） 1964年のイフラのときに学名・和名・英名のリストを作成し、これが「造園学用語集」に受け継がれている。イフラのリストは、当時造園で使用していた植物の中から、一般的なものを選んで記載した。現在では、造園の対象領域が自然公園などにも拡大しているので、野生植物もリストに含めないと、学問の発展を阻害しかねない。いずれにせよ、整理の対象とする植物の範囲を明確化して取り組むべきである。

学問の進歩のためには、猶予期間を起しながら呼称の統一へ向かうべきで、まず、学会の論文から始めて、実情に応じて徐々に一般化を進めていくのがよい。

植物分類学とはちがって、造園では、植物群としての利用もあるので、レベルが多様である。また、外来の植物に和名を付けるのは決してやさしいことではない。これまでは植物学者が主体となって命名してきたので、造園では使いにくいものも多い。造園で使うコウライシバは分類学ではコウシュンシバとして先に発表されている。正式の刊行物として発表されたものをあとから変更することはできないので、名称の二重構造は避けられない。

世界的に造園植物の呼称として学名が用いられる方向にあるが、国による不統一が見られるうえ、学名は長いので略号の使用も必要となるから、国際的な問題としても呼称の問題をとらえる必要がある。いずれにせよ、学会の組織を作って取り組むことには賛成である。

亀山 外来種の日本名を付ける作業は植物分類学的にはあまり意味のある作業ではないが、造園学的には重要な作業であり、そういった点で植物学と造園学とは異なっている。

日置佳之（東京都） 自然保護の観点からは、野性種の取り扱いが重要である。その理由は、①遺伝子資源の確保のため、元来の生育地での植物の保存を進めていかねばならないこと、②リゾート開発等における造園的な仕事には地域固有の景観を地域固有の造園材料を使用し形成していくべきであることの2点である。

石井 呼称には、「造園ハンドブック」の和名を標準和名として用いればそれほど問題はないのではないか。「建設物価」の名称の精度が粗すぎるならば、例えば、サトザクラの代わりに中でも、多く流通されている品種

である関山と書くように、精度を上げれば済むのではないか。

山本 「建設物価」の問題も含めていろいろな切り口があるけれども、まず問題点を整理する必要がある、今の時点であらゆる問題を提起してもらいたい。次の段階として、検討のための組織を作って、やりとりしたい。

沖縄では、オオハマボウ、コバテイシといった呼称ではなく、ユウナ、モモタマナでなくては通じない。相手によって呼称を使い分ける必要があるので、呼称を統一するよりも整理して疑問が生じたときにチェックできるようにした方がよい。

クマザサの解釈の違いによって施工業者が指名停止処分を受けた例もあるので、発注者をも納得させられる公的な裁定機関の設置も必要である。

とにかく、まず、組織を作ることが先決であり、発注者側も困惑している問題なので、広く協力を得て、実学としての造園学を発展させていきたい。

前田宗正（昭和造園） 日本造園建設業協会技術委員長としての立場から今回の企画に賛意を表明する。

花の万博では1000種の植物が使用されることになっているが、同じ植物が別の名称ではいつている例も見受けられる。また、サザンカ、クマザサ、アジサイなどは発注者側にたまたま詳しい人がいると、取り扱いが厳密になって突き返されることがあるので、困惑している。施工業者としては、造園植物の名称の統一はぜひとも進めてもらいたい。しかし、カンツバキを関西では伝統的にシシガシラと呼んできた経緯などに配慮すると、直ちに

名称を統一することは時期早尚であると考えられる。

さまざまな形質を分けて植物を扱うのが望ましいのは当然ではあるが、細分化されればされるほど生産および集荷体制が対応できない場合に混乱を来す恐れがある。

福廣勝介（住宅都市整備公団） 役所の人間やデザインをやっている人に植物の種を厳密に取り扱うことを求めるのには無理がある。現実には、デザイン的な仕事をする人と植栽プランにする人とに分かれている。造園教育にそうした分化が必要である。

造園植物の呼称は、発注者と施工者や生産者などの流通のコミュニケーションの問題であるから、その精度を上げるために植物との文化的な関わりを無視していたずに呼称の統一を急ぐべきではない。

山根幹世（鳥取大学） 呼称整理の主旨には賛成である。ぜひ事業化してほしい。呼称の整理は植物の分類であるから、基本となるのは植物分類学と学名なので、そのあたりをきちんとやらねばならない。

作物学会および園芸学会では植物名用語集を持っている。園芸植物を学生に説明するときには園芸名ということで、例えば、ワクチナシ、ガーデニアとしている。造園植物の呼称も造園名ということで考えてはどうか。

4. まとめ

造園植物の呼称を統一するよりは整理するという方向で、学会の中に働きかけて造園植物呼称整理委員会を発足させて、早急に取り組んでいきたい。